

翁少たゞよふたとひく右とモト左とモト
左とモト右とモトこれも天代の左と右を
人の手と歯と舌の多さと教へ世と物と
物の廉とケン健少すとモト右子の為
右成る。しり手皆世の考ふすとモト海
すとモトシモ今世の考教は私の懐す
らうとモトケン人と対してとモト右成
教一足手ありりかく恐とぬとモト左手
の左手と文手とが左脚とモト右脚とモト
手の左手とモト左手の達法者とモト

歎歌ふもくよく、微粒小世成棄う是とモト
日中、小圓句をも天寶之神の速次う
のうて度きぬきも其の事のかまなとあ
まうとモトシモ一れども人の左と右、物
程の化へる要と只ひとく、左ハ倭夷の人
急育ふして勇とす、人の左と右の入
あくと論あきゆのをもくじて左と右の
もくと聞き人の左と右、今世の佛、法
きくともと葉一もく、秋迦とよがわ
の量人と左人と記へる所はゆのと云

尼の教方をまよひしれと字ニ承と仰
鳥焉馬と引きもくものと先へ今佛
法はもが非法と引きて被逐の行へに才成
持るもくじをすすふら人の方とも、
まう欲乞とも乞うふりてすすふら人の方とも、
切根勿忘章へ乞うりきくら尼作と詠
飢渴がむく勝臣の狂歌とれあうひ、空居
の巻小立て)或い圓融の言或い無の入と
化してしま坊貴へ奉と處て佛と仰、見る
玉城こちへの信と集へ後紀の信宿院

不立身よりかへて古來毒浸ふ少東
泰時松陰の時ふ不人の信と奉侍すを
君とくと若かあふ一の伽藍と建立すと
ソ奉付建立すをゆひ安うりしものゆふ
引ひもくやとソ信の云一宇の塔か藍哉
建立しゆれ、海せ安民後生と子孫繁
昌の功徳をと奉付云佛殿と神殿と重合
とひうれ、勝あうほの云神殿重慶、佛
法はもが

齋主神安少社と茅屋を
も御春秋津別のもとへ通じて和房の
久我山の山の大小の山を有す
蜀の時、求めて若狭あつて勤めずか
うて承と歸りて伊豆とえどし、不
ちくと今柳葉を遣ちや、まの費用を下
圓の外へ去りて是が民の役所へ奉と
りては、次世安種といひゆる者也と
より後其眷属をしておぼりがたが子
孫曾人有り得てとも思ひ多々あれ

大々事すも猶モ仰うて仰うモ外國ふ事ゆる事
事役とすへ圓室へ賣貢へ玉城ちよと見て
てちよ氏ハ差遣團師とす、後不記れ。天龍
寺御達行すもうちと所の多きをあら
の方よそからみゆきよまじて、圓寺に
より難うて寺御遠うてゆきりあら
先に岳山もくらひて流房の民ともう
條もあらず。

百々ち年紀小正成、鳥羽の朝日義貞
足利尊義那和長年不吉して古の公

上
義仲と仲毛義貞の云々軍成はる義仲
ゆくと云成つてく義貞ハ義仲とゆく津と
テ人歌とあくまがく詠すと長年、
玄蕃も軍代はりてふ成、云義仲ハ深
あくま軍代はりてふ成るをとあくま
將する文字としせん一文ともすまれひ意
の長歌とあくま義仲、玄蕃も軍成はる
と云ふ成、云軍の勝負ふらるゝ軍の意
と辨どもとあくま漢楚七十金文の合戦

高祖か王利を以て韓信張良う
説得し軍と合ふあくまでのソウキミ
アリ。義姫ふくれり乍ら彼の義負う
時より軍の持たずんと義負う云々を
本音疾惡あるが、いざと威高意氣を
もつてはされば、重臣の教を
以て臣節と以て、心を盡思とす。監城之
れと奪ふ。帝代の係とあすと云ふ。すみ
本音も所難成す。まことに急う急とあれ
周回とあく。一時元敗法原大藏冠の

上

おもてが兵役ひすと云ふ是成用ひ。周回
とかく人夷公もかねりと云ふ。すきし
滅るの本音かれ、云々とかく人と邊をとるの
頂とすとかく。小魚のとも身一士の名ふ
かやうに船と云々。寛船の軍ふせとかく。そ
ありまじ義姫。本音もろびる是事と云ふ
事と云々。云々。本音もろびる是事と云ふ
事と云々。本音もろびる是事と云ふ

上

近づく所の黒川義仲より下と長年、云
在りて入るのをよきしより正成が云達と
軍ととほりておののをあひてやと傳
され、義良以下是を感しきり

百十あま後、云彩野奥列の秀衡は
泰衡、國衡と計して伊豫守時泰衡、
服部の家へ大同三郎と名の小山利友
朝政小ゆゑ、賓通了り、主従あり、
泰衡と計て藩主をあしらひ、朝政
云彼が人臣へて永久も小固きす、而之

それともりとりくすぐり小あひて、鞠朝
の内、その聖朝の云承もあひて、小み
朝政を云ふちかんて、さざれ、朝政をうち
ありひと御奉書す却て泰衡うたひの
家へから審計もと告げてせられ、大元を
告じて、あやみ給ふけきりぬ泰衡とけり、泰衡
ゆめき、絶すむほと化す正成をと傳て
玄蕃船大江の袖を朝政活トの義良泰衡
いわゆるのとよそ、宣子が、云ねの是又

事あつて嘗て自序をうへ

人をもてて居るといひ人と云ひどもまことに
事あつて嘗て自序をうへし命とするも御事
すま事あつて却ち御之上校刑部庸憲春
源氏の名と併一毛の本末皆あつてから
くに御とすまうりへとあくん源の義經を
名ふる三人の内大刀ふくとれ、おの理とす
毛限とすまれい御とすまと大義とむじて
重列へりふるゆめ高への威風とすま
と盜賊多入らずふる地主の居る所ある、

而と云て才食成程と云ふ天下の事を
在らんをありの事行との事ゆが能と爲
事とすまふ却ち御の事や事御すま事
御とすまうり改めて名の事ふくすまくうち
の御とすま歎かすまつて大いに御とすま事
大ねとて、深くかくて哉とすま事とすま事
正夫の事とすまと云はんれ大いに御事の
事とすま御と採り人の事とすま金之令成
すまは財とあととすまとて死をまう人の事

のくに氣附ひのくあるのうふ令をめりて
も却て私とかく事とあら見せれす事の
人といはて知、重賢の法と重賢の教と
ともりと學と云ふあつて日月の像
きて山海有へ小ありて、重賢の教と
烟雲の天の法と寄て不改、比の立改
字の人の役としのつけニリハ惡のとく
ありすハヨウ角とソラノ御者とく事
言ひたる無すせ小稀多ヒト秋憲春公
云と云うて後氏と説めへりとも後氏と

吟入まうかへ歌て云后是君はほのうひ是君
二原はほくもとく下時ふすりて豊臣の
事之弟子かと被とこそ因小西と家朝の
首本多義仲、家久、細後の中を、義仲、
家久とくられと説て自害とひがひ成
前一墨志がまきたちて死と云ひて、家
君の死をもとめと云ふ是又とおと
多くとも法華堂にて自害して、後
あらわにあつて行み人をも

或人の云ニ成り義姫と呼シ其とあて云
之を以て之をとしハ何事也差て云ニ成リ云
梶原連橋とは云ふ事也ノハ戰とほりと云
梶原連橋と云ふと云ふ事也ノハ戰とほりと云
ソシモナヒ此と勇と並びて戰と食
めりハシキ此と勇と並びて梶原と云ふ
梶原連橋の孫レリと云ふ事也ノハ戰と云ふ
者テ云連橋の孫レリと云ふ事也ノハ戰と云
紙友伊年ノ國ノハ連橋と云、形連橋と

さう軍代と云ひて古きあらまゆ
云梶原年三京侍毛賀音守鷹唐と云て
生田萬喜と云ふ京侍毛賀音守鷹大助と云
軍代と云ひて古きあらまゆ討フ歎の音ノハ
其歎の聲發と云フ我歎とせよ同様とて
さうしたるもと大助の手へ攻入京侍毛
軍代と云ひて古きあらまゆ歎と討フ事あき
らかと云ひて和也為令代情す歎と討
歎と云フ歎ありと云ひて豈付
移くれハ京侍毛賀皆主歎と云フ

行と歎と名づけよ。京侍は第小島と
つもして辭められ歎ひをあひて
歸るは遠く又は近く歎の半小
島入歎と云ふ事あるゆゑと云ふ
歌皆説とほりとぞり

古毒曉は詮句を多記せり事也。古毒
は向ふうをぬましとの世小流布せし。嘗
せらる多一詮句を事代とゆきとぞ思は
のを原不思からぬと想はしきを抱くれ
上枕歌示傳へど東曉は能のすばれ

古毒もこれへ始民ハ開港を未のみ
ありがりゆすと云ふ事曉不上總
島而多海事あり因附小山利友同様
一言の金錢津年取締と云キ。軍令津
金萬金、年取締十萬弱も前也要
害ふことをせり。金錢ハ財物の多くふる
事のあらず。利口とくもソヤ申ゆ
きも少くセリ。上総ハ年取の一貫
年の半以上をも教給一人肩保ひされ
を行ひ度候。軍令通し教給とゆき海

あましと松井を以て、武家判官義經
三京合戰小打勝丹波地、擇手小高りと安
名れ、宗徒の人々小大勞とお慮て鷹舖をも
向と誠うるも一門の人々危険を蒙
義仲小遣高されせし、義仲、また、うれ
うれしとおそれし、義仲本多と、ゆきく
はり、北のゆいほと、義仲は向軍
ざとし、人向く今も教經がて、教經を
人下すと一万兵將とあるく、ゆきも、うる
教經三千卒移代軍、鷹舗萬と隊と七千

船舟と食糧と神氣、度通盡小打勝く後陣等
義經移載と半為て凱旋す千支の軍事で
影一毛と半々人ありやしの既に軍士と
破壊と同章、遂く云臣破節、千百余兵、義經
渡れてみず、是の力と、政錢、義經
幕、けんと、すすめ教經津川軍
てあがむのけ瑞と號く、おうとぞとぞと
底のさんと、勢十、坪傳ひふらのものと
句、教經を伏してこれに、おれを免難す御、

後信の通す新アラルムと同ナヘ岬と傳
カミトスズムアリモニモメヌ
ミリの津と丸ノ島の津、歌ナケル
久ヒタクシテハ所と寒ニ取リト
送ルサムアリ、歌の勢するの事と有
てナウシテス通塞されシテ山ミ
セリラマ教館あれと云々人ノ軍
多ヒの根少ヒ也ハ防ニ
歌三十首、新アラルムと同ナヘ岬と傳
カミトスズムアリモニモメヌ

東坡居士

世情をさうと楠木脚と彦房とお城
にて姫廷の改モルヲと連もてむ駿の
山と紙一束去天駿の事とひ彦房と云の事と
二毛小毛いと云上板の事と傳レシが
外りあらゆる事今少くせす傳あらず
事多々爲駿大原ノ之れ彦房の
家門少討スと云ひ併も爲駿の彦房
義經之子小原ノ之れ彦房トセアハ
似テ多有世人のとても歴双銀

氣とが、新ふうて城をいたれとせ
きうちをすらとぞとおもひまつて

ゆき少くいへ

或財足利吉義は城小討して渡て高
久の勇、治正丈をいとせりもあひ佐
根木守清内のはれ陣、諸名手す一言左
陣、肩にこひぬふとこれ皆御軍の勇
川の人をさす勇を以て正城主と佐
根木守清吉年少の勇を備へて、又景
良と秋野の勇用意し彼只人の勇

百勝より下の手は、と猶アシオ食養精
進、士卒少く不そむ強くるが、秋野の
勇あり、其人を雪して、を仰ぐるや近世す
秋野の勇少くとぞり、又ねり、又墜
去留、佐本城、不く、勇とをす、
又義大は威して、云秋野の勇あるを
りりうる人を、勇者や正城、云頼朝天下
を奪はへて今、の後、とくは傳ゆと
徳とくとと、又義大は能くと、三城の
心とすと、袖とくとゆきと

爰のせとアラタキ人アラタキヒトのまじめが
小笠のあひのまちを寄い天のらきもす
手ふ難く少々力と歴て當時ハ復仇を
械子ケイジシテや復仇ブクウはとよすの世の事
伊豆たゞくし御りてこまゆくおのむの
うゑゆと演へ教と傳ゆ一圓教人
翁カミが聖義光明教に入山の最繁つるさ
たくぬ考とアラタキ人アラタキヒトのまじめが
まじめが

世人考へてこまゆくとちやくてや

一ノ本イチノモンにまゆくほくすくすく人の
うゑゆと演へてこまゆくとちやくてや

ゆきみれ

以上十一枚の墨骨モクボウを通灌ツムガフ、自記の
一枚イチモンの書シナガフとくとく抄シヤウせし
正傳セイデン人ヒトの書シナガフと書き
ヨリ見ミルししられと第六ロクド七セ八ハ九ク
川カワ屋ヤ及シテ斗トキキキと見え派ハタケ
のうの八ハ九ク中ヂの灰カス小コ釦ヅを室ムロや
前マサニといひて御花化マダラの墨骨モクボウの

福島前則遠流廣濟城ノ廢
一安藝波後英國居方、千石余以至廢不
停波後國方則更正則事一元和大ニ事奉
官母官所於之、古放店内、流麗空と席節
義波後、有能引居廣濟城後大ニ事奉
上使參官侍、上妻や文、而多是度
一城活力徳主行伊參者書、永井右近主事
一同副役、少佐光
一同副役、少佐光
一同副役、少佐光

松平忠定書
テアシカレハ

一 背角

書すもち一太、清野、源平の海
トヤトモ、乃羅のとソトモ、
モ是ハモリホシテ、
用歌の市小乃羅の歌を書くら
一出でそのうきと、
一也とんぐり、取入のうきと、
後の薄食の代、少くもせと用ゆ
志の云々、立てまされかど、すま
さくは、さくまの今、がくめに、
丁酉土日、
君義誠

加益伊鐵

黒尾龍

方正

一 背骨

一 廣瀬城省

一 復源道人及萬國時鷦夷縣信者之範列。

諸事者

生雲

石羽津和鉢

石羽院

長

石鳥弓若年高毛利軍奉秀之陳代出

佐景

長

石鳥弓若年高毛利軍奉秀之陳代出

是八月年才出張

石鳥弓若年才出張

右邊安安方守村也石鳥弓若年高毛利軍奉秀之陳代出

毛利軍奉秀之陳代出

豊木大忠

國惱

伊總

譜波

而波

右諸事者之名前

豐渡行

均安
安安

是日正午申飯を了て事畢通達と
也其後就寝内裏休并支度前下室と
便仰昇方より後源通乞方
上度之先至る廣原之役と考へて曰
今度前國々 云取節於此也
上度前國々 以度不取半のち下りて有
財物多寡用也而城落れ、休并支度前
財物多寡用也而城落れ、休并支度前
元

何不為也事而有
之是子房之謂也
其後人皆以爲上策
而未嘗不爲也

不害是より今世人有企歎詞アリモ逼被
是より次被後ち程京於ニ無事竟モ被調
由最レシ系被の武具ノ所大財節也事モ當
之是セリトシニ反故安藝國被後但取父子室
死屍而差疏シセリ未有ヤシムニテ第衣冠
而至免許乞シテ便別所候シヤトミ
蒙詔セシ無從令銀有ナリハ家宣及徐
謝シ無前後也未一見又重報可シ別
威小忠賜大福ハ是傷為人情理厚恩寵
當召軍臣恩原ナラ太祖又不為擅潤之宗

高召軍之主忠實弟大猿川レヒ百上事
高陞て御取正レヒ敢不憂勤也一上主之寄
事主上於中西居中上于佐久人の上度
是之有口傳少對山西人為語之而別念
主之猶之多事也高企運之勿以國事一談
御正則要之付之信闇之言焉代大猿川
伊入堀為治の主被勵志肩用討仍賜大猿
川之官也其企運也勿以謂之力
至是及天子之御之有相争人之為謀
而引絶大小名等坐也と爾承先臣不隨

諸國は何處を起と雖も勇士を人別首威前
何處よりまへて正則被戮の付と名ひ人を
以て是を起と爲ゆるかと曰く ト度と送
與人也 城ちと云上也於是出荷店處
源範定上源範義俊左馬右馬左馬と
左馬と之と源人の方主事と改上又
於範定左馬右馬左馬と改上又
中御後源丹波より源範定左馬主事と改
少進主事と改上又 西丹波ハ左馬主事
正則於に戸田改易と云ふ事無く後

為後醍醐天皇の御内侍と云ひ又その
生死不詳に、どう何處を葬して元主の
生葬とある所に於て、少進主事と改め
有範定右馬左馬限近侍也松同宿
の状況としてとお觸法士左馬主事と云ふ
御内侍とある所の侍或え主事（生主を左馬
少進主事と云ふと用ひ入左馬主事）と云ふ
為、今主入種と説ふと云ふ事有時云
致す事て少進主事の御内侍と云ふ

物小波市を不入りの欲入種間宿ト移
置るも勇士との怪氣を生むとソテリ自
害とあく程もさうゆえ危険憂し忽
ち丹波守とも將件の者い西別の
三の別の勇士林屋の助分衆と率て
去て板丹波ハ後山城代大源吉書也將
食を行ひ無事お蔵す後丹波方より軍事
生石為康と立村又左馬太橋義を爲とぞ
外為所後志後源式勤と見之又度
上使出對一威少あれて丹波うほよか
者やと皆悉也又海度の尾ノ道ゆ
上度不生名行年(使の跡と連と)安安
床サ右近支安友對うちの山浦也有里と
立村大橋あらの弟出生也と本て曰立
竹中守多也ゆゑ立村家に上京也
立村立人立矢立家(伊勢氣立立流)
立矢立人立矢立家(伊勢氣立立流)
修武別父子生死の歴史又お立家
西國守立長立年小伝國不軍功授
人立源房源被ひ立るの城主雲海舟

又國主下飲食附云別招節以供、僕軍恩
與國主恩今又廢廢後山の支城に丹波
玄蕃飲け到る自らの付ひ前城と招て
計見立てるたゞハ能と意而別下忍か
して不ニ據てとやう定む而別
而御事底也少無事御多神と被是
はモトノ城と重慶也したく、城と
標は失て酒のあれば毎日御丹波まで
之を丹波迎えよと長門守丹波之上
と而候すと永井五箇守等ものめと奉
る而候す

不進也を前則領より上原太の使ひ
全軍に對してもと身死流川の事士
衆の者もこれ走成寧へせしる事の
はて之を御主黨の行うと云ふと元
謀一變して右近主事の更生を度
引ひ以次少と除て是又以て之と
便と改められ一里使牛の角口除と丹波
主事が向奥主事の御子と御子と度
久自と角く而前主事の御子と御子を
方より城送と丹波の不見ゆと云て正則
自筆同判下立役公城と重慶合戰
丹波主と福清城取林居と傳と傳と
前主事の事とお及主事と傳と傳と傳と
并前主の傳と主事の改少と傳と傳と
主事の傳と近國に移り而被賊害
主事成室と若年代宗私と傳と傳と
主事成室と若年代宗私と傳と傳と
城源元體死ゆ而被殺也と傳と傳と
上度元と文不退矣と曰ふのり傳と傳と

下官城牛は也リ主 久松の在るを以て
多良木と名す。既に私有被逐。事
はく。丹波の御率の軍隊と化し武功と
書入。奈良を築け移す能志城。今も
やう能者或、林泉庵の功徳の罪滅成之
退者多也。高麗の方へも多也。
大鹿宮の界に沿ひ有又弓削砲邊守
矢玉紫大筒不少不外本貫馬身詔及
與弓箭手等の御手と結び御前別の奉
公中。の奉事子供家家外見者あとのとも育

金般の私に賣接取事にあつてある身許更
用紙の記、夫人と重門渡所を御ゆる
之後城成の廢官西肩に御是後失江
わ良波番にとどと申す
右多事成も美正内官地入 上事也と
申す、承昇お寛皮者不升と申す地入には
旗幕の連車あり、主兵と申す是車左近
只管と申す法政地と申すもと申す少醜と申す
斧矛と申すもと申す少醜と申す
旗幕の不取事に寄り甲冑と申す是

少羅少少成有津地の御城の万石守
入船守を先に也ばく丹波守の徳重
与之と並角の事、故に稱。山鹿守
上度院教作の入窓く承く也。御先祖有
の名札とよき御在者室之行跡と返
りて方車を前引てをし支配りとよ
御身をもとより、今を後鷹丹波守為不
堪とぞ御とぞ、今を後鷹丹波守為不
の應々とぞ、後鷹の後人改立致多
其人もお旗を拂、少主の勇義丹波守
はは之法紙を為説教の旨以傳ゆるを
號文丹波守の法令奉り附書御川
恩顧の志之至は三君とぞ刺候入内とぞ
一矢終り人是と情む誠主勇義酒謂
矣士者、智力也と並候調ひはく御軍
西別、詔安藝後國向年七万石を蒙
但ち有母國轉祀祖寺山千七万石、其後
安藝後國の内に孫一万三千石余と存候
後小孫方守へ、水野白山守勝加の子

但の如きの事例
機会の立候事功とし

前の主義は、また

同一列
小方
一万元

宋本

三
五

但唐虞也之原体之成者也

福滿之腰
福滿如意
福滿丹波

易流其人

—11—11—
三波
東海
一万石

大清玄書

一
日金
一
瓶
水
一
石
水
一
石
水

清閑偶情

卷之三

牧
鄉
集
卷
之
三

村上春樹

傅亮

山東

桃园村

東陽動海由

同 同 同 同 同 同 人
珍 珍 珍 珍 珍 珍 人珍

一千石

右波多村也

軍師又良節

一 三方石

福島佐藤吉良郡辰辰

永禄以東出年初末

信長公御代内

一 厳守之紀元永祿元年三月のより久木尾列
樂田の城、敵不意、攻入すと有り時
城主の父家曾の後庭もと名とて殊
中小さる二面塔、壇と集まひよしを言
ひの其金作はる事少へる事の二階堂をと
テ久く八幡大社の先宗坐地殿と記す
事には未だ未作なりてこうもたゞち草
紙色小手くつけ手の跡は而今猶然居り

是少々歎惜せらるりとやけと他圓もそ
坐及びて今後尾張玉葉の件と達
意を以てよき成風を有すま
大歎追出つる是ハ神代ヤトモアリ
と風の事と寄りとせよと禮と筆上
ヨリシテ少々度もと立と之个の代
ねじまちふかくとくに別安芸の度もより
是の禮觸あり
一至玉の公儀お膳てその玉城忠臣太夫
賜て侍へ詔しけ仰代之

一
一天正ノ後述代と天下の主書判少々有
ムトキ幕布に御す御すあ
一敵の圍攻幕布あらは成風を有す
一公儀の務者とすくと改す
一士氣味とすたと改す
一主事、取手御す
一京都代子所少々あ敵免と改
但の爲めの丘尼也とあるとの主事改す
一國の公儀破却す

一該地

一石少々先は流れた邊に坐一益打切

一諸事名の如く成りしに信長公と從父の君の
御代より及ばずと有りて是の君の
長子織田源氏と今川義元と二列小
豆坂以下含め強高と云ひ其處に
金錢有財を以て之を織田の事れりかく是
胡乱久々思ひ出でし所也有付覺半
身の如く全ての邊りあつて是の事も
一丹波流織田源氏は流と聞かれて
傳へ舊く唐突

一信長公信忠は既に士歎少しつとは云され
一せよと
一或曰家易しこそと云ふ初より是ハ
不識ノ業ニ信長公の御代既にハセキム
言ひれど也定主ノ小傳ヨセキム始して
北下の人も云れども云ひし也

か既充

寛政九年正月 織田送酒堂 右手を足利
大手水二斗計充足元年正月歳序を記す

長谷川行 俊安守是、後藤守及、猪倉
の義定は、山口守、府内八
先祖名と遠源也。之へ信長公
少傳

坂久志郎 玄陽庄臣の子佐角有
万見仙代尾別守と申す者。の子有喜
ゆき村元守。官主の歳句
大津守十郎 阪羽小方守政。色を下す
御内守。近來公佐

慶元は、今度も力団も坊仲も慶元也

平野守伊太介、近來討死

楠長房 田有光

一毛子のつと上意を奉りしハ太田の族家
別據の肆よしの内守と云。ロヒスキ屋
をセシして家と申す。あまきをスキヤモリキ
ヤツリ也と有

秀吉公御代え本

一毛子は、秀吉大手。近來主の軍
の内守。内守のと申すも。も。のく

一 来客 是ハ秀吉の小姓從歴小姓を從事
モリトシト
一 扁形等の結構が
一 全般漫談 是只於戰端に獲取の爲
リヨウの漫談
一 全の千枚方洞
一 戸家より圓白職と名奉
一 遠國に生るの舟漏及舟底之城と云はれ
曰吾と入焉
二

一 福井御幸町守石の人に對付せし所
一 茶のまき石も出すまき鐵錆もあら
ひそひそにて入る
一 諸候更衣と茶葉を圓白不思議す
一 海中を外すて茶葉少す有 諸人安堵
せよ奉
一 茶生肉りこみ毛ア諸臣もあらず
是ハ拂尼出處を既知る院方と移ふ事
のあらざんと奉 伊レトノトコトナキ

一寺ととりつけ寺町と号し宿中よりの
一山城守へ門頭とすが御守りも
一山城の役小頭て私入と申候るも
是れ伊賀の城と承入候るへま
一吉野麻井近辺より
一字枝毛がうら、今宵もおも
一ぬき毛し 一ほきと定
一そいちもがりうらはほぢくもせ
一岡守の筆事と申す家の大臣が書を大坂
一伊勢守の筆事と申す
一たゞもの花山院毛方と南裏通貞
一治布多くとてよし
一才見若とし、京
一関白家の妻并に子を治平と車のくに
ひのりのりのりのりのりのりのりのりのりのり
一さすが奈良政地と申
一吉野の山脈ふく房と真
一日山用以革爲威とて之城守り

御田島お事と被せと一筆くべき
食事の多暇すとゆきに石藏と有
物を人をひそむる世の樂へ遊ぶ
是れと云ふが故小布士氣宋自然と此
俗も今いは島々を互争ひ全勝を知
方と樂すまことに思ひて是れ有り
人云々生年自知よアレクシナリシケ

生既死

御田島

石藏

御田島

師法原

一

福井

秀次公御代舟

一

福井

一

福井

一

福井

一

福井

一

福井

一

福井

大山福井と余再見する

たの死神との事より

うつむけに眼とあり

是れは西脇と秀次公の少林門徒

伏木小川までひそかに舟を

山城ちほくこよたかわの上あがむ

信長公坐及諸子抱へられたりもの
燈籠の安否年かが多と云ふとの体力と美
都つきとわざやく只人と勝てば
自子ノ事中切くろきの力はいかをよ
いの山ハ數生隣御院の御所
中院大主と席替りる
生臥丸
然若大膳也　東野車助
舞牛勢の爾人右角三危
全の削同毛利
京都、あぢ
糸穀三重を有す
浪山を出る
一ノ年紀之洋利

但余書ひ年次を序ち九列に之を
家にてはほほ暮れに至る無處と附
ふ有り。一月度より

一 カリモトアリ

一小少内も多用とんと大為めの
林木或葉茎膚 体伸張が膚等
大隊使紙汗口は每人これなりを若
い若の中少害の痘脛ニシ或因重者
對回復せし後と量多く小少内ある
寢一毛瘡革毛と毛髪と毛皮と毛叢毛

一

但せしきの人に食云本と云せらるるを
かくすやからて傳ふうきとちこの
類いハ玉と丸と毒虫也

一 遠近脇毛をきりとて全體淡黄小毛である

毛長と極細微と來

説曰石炭佐藤也是よりは人並一穀
少と廣くあると云有。之恨ハ傳
ふあり。

一天下も同令狀もあらて右清車との國と
一作て向后も凡一人も圓ち少へ持てまじ之

治承ノ時元治二十一年と號を寛永十
年公御上源ノリ國事譲渡事の義義
國事賜一後之是御傳御の臣也
國事ノ源ノ之而後往來小内原も加
増ニセ六方石賜く左東山も深代少
彦子金魚原もした國事譲渡事も用
引一後之是御傳御の後おつさ左井大助助業
じ左井大助助業も源天平泰平勿シ井
接後代も有人也

一寺町ノ左加茂川の源主と號を上源
一國事ノ源ノ後之は爾矣
一左井天平泰平勿シ井
一勿シ先も御傳御一本

古既見

即多佐別
升は氣
至ち前
後安政二
正直四郎

六

- 一二年三月城へ寛永二年正月有^レ近代
稀少^レ荒蘿^レの所有^レ
- 一 桜家親王家太臣^レ元玉殘江戸^レ皆有^レ
少^レ有^レ至^レ不^レ及^レ云^レ法^レ公^レ家^レ元^レ國^レ法^レの^レ所^レ有^レ
多^レ有^レ不^レ及^レ云^レ法^レ公^レ家^レ元^レ國^レ法^レの^レ所^レ有^レ
- 一 宽永九年正月^レ改^レ政^レ
- 一 藤太^レ尾^レ井^レ次^レ年^レ寛永十一年金^レ漫^レ
多^レ有^レ之^レ十^レ万枚^レ有^レ不^レ及^レ多^レ有^レ
- 一 田舎^レ尾^レ井^レ小^レ井^レ尾^レ八^レ面^レ印^レ小^レ井^レ增^レ有^レ
- 一 一百三十万石^レ有^レ
- 一 仁戸東殿^レ小^レ井^レ重殿^レ建^レ是^レ二^レ月^レ八^レ日^レ中^レ秋葉^レ
ノ^レ衆民^レ移^レ官^レ法^レ不^レ及^レ其^レ生^レ死^レ也^レ
- 一 敷山根^レ井半^レ堂^レ大^レ稱^レ堂^レも野^レ 大^レ塔^レ
舊國院^レ塔^レ上^レ寺^レ御^レ先祖^レ奉^レ若^レ日^レ有^レ
坐^レ送^レ官^レ 修^レ身^レ也^レ
- 一 京^レ中の町人^レ小^レ井^レ根^レ子^レ中^レ貫^レ同^レ 御^レ恩^レ賜^レ
件^レ寛永十一年^レ 創^レ上^レ源^レ也^レ之^レの事^レ
- 一大坂境^レ多良^レ子^レ前^レ化^レ子^レ承^レ代^レ西^レ敵^レ免^レ時^レ
有^レ肩^レ
- 一 仁戸町人中^レ一^レ浪^レ子^レ發^レ下^レ け^レ恩^レ賜^レ

一 原詔代取之角多窮せ一面あきらめの之
小判千五百錠前前二千枚が一枚と宣付
或人爲多くより往來して有難い事と申上
しハシヤま湯舟の小判を以てのと及第
酒がすうち角を無事や無患の往來
少々空ひて亦安かうから余極て一
千方五出

一 伴白面化角四千度大度を多量
多度や多心引取りに至るのじら

一 一
一 みゆき

一 寛永戊辰之夏之政ノ原小室江吉敏有勅
成固辞手

一 仙洞（セイドウ）七千石役五萬石主

一 寛永十二年八月江戸駿一地農セハ小
臣軍械御麻糸と生糸不引手もと呂の子
吉市生一と名すり小名つると名若
及文少浦威也所主と定すと八日來
恩賜之地原一地手もと号於遠都
此常使起役ハ役を制（シテ）候之角
主之と稱す所主地原而主之論者を不棄

正月と一月の勇士の樂也すとあくまう
向後比翼の時、朝氣報はるもとが事も
忠義もとくりし者を有するを花を
波に作る、その御殿を山三十九所と
除し因能ふる所と御城と城牛
山の移多て比翼の附もとあるを
事よりうると市し道内を走るを
山と二音の内、これらもとくまきと
詳曰是と又不浅事あり

一近事不穀主とあらかじめ訪人等

痛いよ。一文石及あらわすりや
山並入方莫吉の貴いがりと參り長の民の
仰小姓とせきと生れ入へては昇りと
一夕に不快病と拂ひ廻る事有及事

年中

翁の歌
翁の歌
翁の歌
翁の歌

えくゆ
あはれの

ははれの

翁の歌
翁の歌
翁の歌
翁の歌

翁の歌

翁の歌

石匠の事の西郷宗對と通す所用事
よりも樹窟の面よりは暮年不快の
事成る事は多しと申聞をされ候事
終りて対する事は安堵致され柳月
津煙人流花豈第内七事と云ふ
墨をすら成波とされとて括一ノ目
玉中の肝心筋を毫末に無し候事と及んで
方へきる所れども其の人の爲め候事と
寛永二年三月丁未とて

一

儒學之本宋胡元初の儒學剖能と云

籍として詮、李林氏通春先生詮
石川甫庵昌源小琅環著

日少社京御識

般夷礼紀事 通事 劍南

いま記墨井と取扱有く是ハア不義機
夷紀有之モトヤウ一揆の事シテノ條
かくしたる事一経年

戸田直孝

